



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『Acta Theriologica Vol. 47, Suppl. 1, 2002. Theriology at the Turn of a New Century』 Joanna Gliwicz編 (Mammal Research Institute, Polish Academy of Sciences, Białowieża, Poland)
Author(s)	大館, 智氏
Description	書評
Citation	哺乳類科学, 42(2), 171-171
Issue Date	2002
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44414
Type	article
File Information	MS42-2_171.pdf



『Acta Theriologica Vol. 47, Suppl. 1, 2002. Theriology at the Turn of a New Century』

Joanna Gliwicz 編 (Mammal Research Institute, Polish Academy of Sciences, Białowieża, Poland)

この論文集は二人の著名なポーランドの哺乳類学者である Z. Pucek, R. Andrzejewski 両氏の70歳記念に Acta Theriologica の特別号として編まれたもので、2氏と縁の深い7カ国23人の著者が書いた13の論文よりなっている。論文はアメリカやイギリスからの寄稿もあるが、主にポーランド、ロシアおよび北欧の著者らによって占められている。また対象としてトガリネズミ類や齧歯類が中心となっている。

まず本書の構成を挙げる。始めに編者の J. Gliwicz 氏の巻頭言があり、次に生態学 (6題)、進化と生活史 (5題)、生態生理学 (2題) の論文が続き最後に Z. Pucek, R. Andrzejewski 両氏の主要な出版物のリストが載せられている。

次に簡単な掲載論文の内容を紹介する。生態学の最初の3題はいわゆる北欧学派の人たちによる齧歯類の個体群変動についての論文である。彼等は本学会員の齊藤隆氏とも共同研究を行っており、日本のエゾヤチネズミでの研究成果もこれら論文にも反映されている。他の1題はトガリネズミ類の種多様性問題について、残りの2題は哺乳類の行動圏について書かれている。進化と生活史のセクションでは、ポーランドの中新世の化石、齧歯類における歯と骨より生活史を推定する方法、ヨーロッパトガリについての核型多型と分子進化、トガリネズミの体サイズの決定要因、トガリネズミと齧歯類の生活史の比較、についての論文がある。最後の生態生理学には2題があり、それぞれ哺乳類の赤血球の表面積に対するヘモグロビン量と非冬眠哺乳類の生存戦略について書かれている。

最後にこの論文集に対する感想、意見について述べる。トピックと著者については、当論文集の目的により Z. Pucek, R. Andrzejewski 両氏の興味と人脈のなかから論文が選ばれたので大きな偏りがある。したがって「Theriology at the turn of a new century」という副題は少々大袈裟である気がする。また寄稿論文のほとんどがレビュー形式のものでありオリジナルなデータはほとんどない。しかし、いずれの著者もその方面で活動的な人で

あり東欧、北欧を中心とした小型哺乳類研究の最前線を知る上で貴重な論文集であるといえる。ポーランドの哺乳類研究所は1998年に「Evolution of Shrews」という単行本形式の論文集を、2000年には今回と同様に Acta Theriologica の特別号として「Evolution in the Sorex Araneus Group: Cytogenetic and Molecular Aspects」という論文集を発行している。これらの論文集にももちろん今回の被献呈者である2氏がかかわっている。このようにポーランドでは小型哺乳類とりわけトガリネズミ類の研究に力を入れており (もちろん大形獣の研究のレベルの高さも有名であるが)、トガリネズミの研究者である私にとっては個人的に非常のうらやましい限りである。ある分野での研究の発展は、研究者の層の厚さと研究者間の協力関係と適度な競争関係があって達成される。日本でももっと小型哺乳類の研究が盛んになることを心から望む。それには Z. Pucek, R. Andrzejewski 両氏のような良き先導者がいて可能になるのだと、大学の教官の一人として反省を含めて痛感した。

大館智氏 (北海道大学低温科学研究所)